コメント④

大学史とグローカルな視点

福岡猛志

一　日本福祉大学という大学
二　「大学史」を語る意味
三　「名古屋大学史」への期待

私は実は名古屋大学の卒業生ですが、入学したのが一九五六年で、恐らく、この中で一番長老ではないかと思います。ちょうど第一回の『経済白書』が作られ、その中で「もはや戦後ではない」という有名な言葉が述べられました。あれは一九五五年の経済について言っているわけですが、一九五六年に出版されました。そして、戦後の日本を長く規定していた五五年体制がスタートし、まさにそれと重ね合わせるようにして高度成長が始まってくるという時代を駆け抜けてきました。

そして、四年生のときに伊勢湾台風の直撃を食いました。大変なことだったと思います。今年五五周年の記念に、「それぞれの伊勢湾台風」という映画が作られました。そのプロデューサーの方とお会いしたときに話が出たのですが、いろいろ取材し、映画が出来上がってから、この伊勢湾台風のときに学生たちが立ち上がって救援活動を激しく展開していったのは、名古屋大学と日本福祉大学だったことに気が付いた。あらためて取材して資料集を作りたいと、プロデューサーの方がおっしゃっていました。くしくも、私はその福祉大学に就職したわけですが、伊勢湾台風のときに私は、同じ名古屋にいながら日本福祉大学という大学があるのを知らなかったのです。

一　日本福祉大学という大学

日本福祉大学は小さな大学で、一九五三年に中部社会事業短期大学という名前でスタートしたときは、教員が六名、学生数が八〇名ぐらいでした。その当時、「福祉」という言葉はまだ一般的なものではありませんでした。社会事業、慈善、救済というイメージで語られていた時代に、戦前からの宗教家であると同時に社会事業の活動家で

あった、鈴木修学が創設しました。この方は日蓮宗の法音寺というお寺さんで、その新興宗教のために、戦前、治安維持法で牢屋にぶち込まれたという経験を持っていますが、社会事業に邁進しました。その方の事跡はある意味で次第に伝説化してくるのです。

寺の記録を見ると、鈴木修学先生はハンセン病の患者と一緒にお風呂に入ったとされています。そう言われても不思議ではない荒法師的な雰囲気を持った方だったようですが、これはきちんと論証しないと偶像化してしまう。そのことによって、かえって事を見誤る、時代性が分からなくなると感じていますが、そう言ってもおかしくないような雰囲気を持った方でした。その方が、戦後の、直接的には浮浪児が蔓延している時代の中で、社会事業に従事する人をつくらなければならないということで、お寺のお金を使って小さな大学を発足させたわけです。配布した資料に記しておいたような烈々なる「建学の精神」を掲げています。

当時、社会事業と名乗る短期大学は、日本には東京と名古屋と大阪の三つしかありませんでした。東京は今、日本社会事業大学になっています。大阪は大阪府立大学の一学部になっています。そして、一九五七年に日本福祉大学という四年制の、日本で初めて単独の社会福祉学部を持った大学をスタートさせたのです。その直後と言ってもいい時期に伊勢湾台風の直撃です。全学をあげて救援活動にとりくむ、その中で建学の精神が血肉化します。教育標語「万人の福祉のために、真実と慈愛と献身を」は、そうして作られます。当時の話を聞いていますと、後に社会福祉の分野で活躍される先生方も、「『日本福祉』とはいくら何でも大げさだ。せめて『中部』にしたり、『社会事業』にしろ」とか、いろいろ意見があったようですが、ご上人が頑として頑張るので「日本福祉大学」になったのだと。「今、良かったね」と言っているのです。そして、今は大学の名前もブランドとして登録することができるので、今、「ふくしの総合大学」で登録しています。ですから、皆さんは「ふくしの総合大学」と名乗るとパテントに引っ掛かり

ます。そういう前史があってつくられた大学です。

私は、この大学に赴任したのが一九六九年（昭和四四年）で、それからずっとここに置いてもらいました。副学長兼付属高校長をやっていたので、定年を一年超えて退職し、名誉教授という名前をもらいました。先ほど寺﨑先生と話していましたが、名誉教授と言うと給料をもらっていると思う人が時々いるのです。よその大学はいざ知らず、私どもの大学で名誉教授というのは、もう教授ではなくなったという意味の称号です。知多半島総合研究所の所長は、それとはまた別です。来年喜寿になりますが、定年後も含めて、この大学と一緒に四六年間過ごしてきたことになります。

そういうことで、いろいろな思いがありますが、今日は寺﨑先生の話に大変感動しました。もう一〇年若かったら、大学でやらせろと言って大学史に取り組むのだがなという思いをしました。それから、私が注文をつけたいと思っていたことについて、名古屋大学は実際にそのような視点でやっておられることが分かり、大変心強く思った次第です。

二　「大学史」を語る意味

大学史は、価値あるものの発掘・継承をすることと、問題点の克服が基本に置かれるべきだと思います。そして、それが自己確認になっていかないといけないし、同時に、それを発信していく必要があります。それに先駆的に取り組んでいく部局ないし教員集団は、他の教職員、学生に対してそれを呼び掛けていく。そこから教職員・学生が

それを体現していく方向に進んでいかないといけないと思っています。「語る」から「体現する」へと書きましたが、私学の場合は、こういう建学の精神を中心に学んできて、「私がこういう仕事をやっているのですよ」ということを世の中に体現していく。そういうときの拠り所として、それは必須の教養だと思っているわけです。

ただ、国公立と私学は違いがあります。私学は何といっても建学の精神だと思います。それは先ほど寺崎先生からお話がありました、まずいこともあるのです。そのままやると、「いまどき何だ」という反動がある場合もあるわけです。それはその時代の中でそういうものが作られたわけだから、今の段階だとそれをどう読み替えるのか、どう作り替えるのか、どう克服するのか。こういうことを含めて、私学はやはりここから出発すべきであると思っています。

三　「名古屋大学史」への期待

しかし、名古屋大学は違うと思います。先ほどのご報告で、全く安心しました。日本の大学史の中で名古屋大学の歴史を考える。グローバルはさて置いても、少しナショナルなレベルで位置づけていくことが大事である。もう一つが、この地域において果たした役割を検討する。どちらも入っていましたので、非常に感動して聞かせていただきました。

それから、私的な感想としてつまらぬことですが、名古屋大学は、なぜ第八高等学校だったのだろう。仙台へ行くと、飲み屋の女将が「第二高等学校があったのだから、ここは学都だ。名古屋は何高ですか。そして何都ですか。」

と言うのです。「うちは八高」だと言ったのですが、そういうのが地域の誇りとしてあるのです。確かに名古屋市のマークは丸八ですが、なぜ後ろの方なのだろう。四、五、六、七高がなぜ帝大と結び付かなかったのだろうと考えたりします。これは、国策との関係、地域のあり方との関係を解くということです。

それから、名古屋大学は私が入ったときは、文字通り、タコ足大学と言われたのです。あちこちに校舎が分散していて、何ともならないわけです。全学サークルは学内でやれない中で、私は男声合唱に入って燃えていたわけですが、練習するにも外へ行かなければいけませんでした。

それから、私が学び始めたころは、まさに高度成長の真っただ中で、名古屋大学の発展計画は工学部を中心に回っていきました。そのことの意味は、地域構造との関係で考えていかなければいけないだろうと思います。

それから、歴史的な制約と文学部の移転のとき。これも分からない方がいらっしゃるでしょうが、元八高の跡に教養部がありました。その教養部の門は今どこにあるかご存じでしょうか。今は明治村の正門です。私のいた史学科の校舎も、今は明治村にあります。ただ、東山に移転するときに、設置基準で、これ以上のものを造れない。狭くなったのです。経済学部は桜山から東山へ移るとき広くなった。設置基準をはるかにオーバーした。だから僕らは、簡単に動かないぞと言って頑張ったのですが、今は設置基準をどう満たすかですが、当時は設置基準以上のものは造ってはならないとなっていたのです。それはちょっとおかしいのではないか、それは学内の政治関係ではないかということを私などは感じました。

それに関わるのでしょうが、今日見せていただいてあらためて確認しました。名古屋大学で文系出身の総長・学長は、松坂佐一先生だけだと思います。それはなぜなのかということはぜひ解いていただきたい。学長、総長の先生方のそれぞれが立派な方であるということは疑いませんが、民主的な投票の結果というだけではない、大学の構

造問題と教職員の意識の問題があると思います。

時間が押してきています。パワーポイントを使うと必ず時間が延びます。これは原則としてそうなので、私は確信犯として使っていないのです。お顔を見て話したい。うなづいてくれるとうれしいのですが、娘から、「目が合ってうんと言うけれど、あれは分かっているのではないからね」と言われました。山折哲雄という哲学の先生が、日本の教授学を破壊したのはパワーポイントだとおっしゃっています。私はそこまでは言いませんが、確信犯として使っていないのです。

私どもの大学の建学の精神は、伊勢湾台風で直撃を受けた中で試される。本当にそれを学ぶ現場が被災地だったということを当時の学生たちが言います。そのことが今伝統としてずっと伝わってきています。先ほど名古屋大学の伝統と聞いた瞬間、電灯を思い起こし、だからＬＥＤだなと思ったりしましたが、うちの卒業生にはそういう大物はいません。それぞれの現場で頑張っている、尊敬すべきたくさんの人材が出ていますが、それぞれの所で、どのような現場で、どのように働いているかということは、学術の面だけでなく、いろいろな所で試されるのだということを先ほど来つくづくと感じていた次第です。

後ほどの討論で発言する機会があればと思います。今日は、そんな小さな大学で、ちょっと変わったことをやっていたので、面白そうだから出てこいということで、堀田さんが呼んでくださったのだと思いますが、勝手なことを申し上げて申し訳ありません。名古屋大学の大学史は、立派だということをあらためて感じさせられました。

京都大学の展示は、私は博物館学もやっていたものですから、これはこれで大変興味深く拝見しました。今度行ったら一度寄らなければいけないと思っています。

（ふくおか・たけし　日本福祉大学知多半島総合研究所）

「大学史」とグローカルな視点

日本福祉大学知多半島総合研究所所長・日本福祉大学名誉教授　福岡猛志

1　「大学史」を語る意味

◇価値あるものの発掘・継承と問題点の克服
（自己確認と発信。「教職員・学生に対して」から「教職員・学生が」へ。「語る」から「体現する」へ。）

◇大学が、曲がり角にあるから

・マーチン・トロウの言う「ユニバーサル・アクセス」の時代
・グローバリゼイションとイノベーションの時代
・人間の、社会のあり方への根本的内省の時代
（過度の）競争原理の導入による大学再編の嵐。・・・・個別大学の（競争的）個別対応でよいのか。固有の強みを生かしながら、大学の「機能分化」ではなく、それぞれの大学に、それぞれのレベルで諸機能を内在化させるべきではないか。

2　「名古屋大学史」への期待

◇「日本の大学史」の中で（さしあたりグローバルは措いても、ナショナルな位置）検討する

◇「この地域」において果たした役割を検討する

・なぜ、第八高等学校だったのか。なぜ、七帝大だったのか。四・五・六・七高はなぜ帝大につながらなかったのだろうか。（「国策」と地域の状況）
・私の入学は、一九五六年。「たこ足大学」から統合へ。重点としての工学部の拡張と地域の産業構造の転換。文学部の移転（設置基準の呪縛）。
・学長が優秀な人たちであったことを前提にしつつも、文系学長の希少性は、特色ではないか。
・・・・・私的な感想です。

3　大学史を語る意味は、国公立大学と私学とでは違うのではないか

…私学は、「建学の精神」の検討が不可欠。それをそのまま拠り所にできるか（それならば幸せであるが、その現代的意義について、不断に豊富化して行かなければならない）。それを克服することが課題となることはないのか。

4　日本福祉大学という大学

◇創設は 1953 年中部社会事業短期大学（社会事業短大は、全国で 3 校）、教員 6 名、学生 83 人。

◇創設者は、宗教家（法音寺山首上人）であり、戦前以来の社会事業家であった鈴木修学師。

◇『建学の精神』

　この悩める時代の苦難に身を以て当たり　大慈悲心　大友愛心を身に負うて　社会の革新と進歩のために挺身する志の人を　この大学を中心として輩出させたいのであります　それは単なる学究ではなく、また　自己保身栄達のみに汲々たる気風ではなく人類愛の精神に燃えて立ち上がる学風が　本大学に満ち溢れたいものであります

◇篤志家による慈善・救貧事業、政府による社会不安抑制のための社会事業といった戦前的イメージを脱し切れていない時代。『福祉六法』も確立されていない時代。

※児童福祉法（1947）・身体障害者福祉法（1949）・生活保護法（1950）・知的障碍者福祉法（1961）・老人福祉法（1963）・母子及び寡婦福祉法（1964）

◇1957 年に、日本福祉大学（４年制で、我が国最初の社会福祉学部）への改組

◇学生の出身地（全国）・年輩の従事者・福祉マインドを持った若者。

◇夜間部を置いたことの意味、1959 年の伊勢湾台風の衝撃と救援活動。建学の精神そのものの実践教室。これは決定的意味を持ったと、私は考えている。

◇『教育標語』…万人の福祉のために　真実と慈愛と献身を

◇60 年安保、修学師の逝去などを経て、寺依存の経営の行き詰まり

◇大学人による自主的改革と発展計画・「民主化闘争」（「近代化」への道のり）

◇「三者自治」の理念の確立

◇カリキュラム３原則の制定（あえて引き受ける教育負担の増大と、それをプラスに転化する方策の模索。）

◇長期計画の第一歩としての「経済学部」増設と、総合移転の断行

5　移転後の日本福祉大学

◇「知多半島総合研究所」になぜ「半島」を入れたのか。

◇自然科学系の研究が一国完結ではないことは言うまでもない。人文系でもそうである。しかし、その学問が生かされる場や、問題を発見する場は、しばしば生身の人間が生きてしている「地域」である。

◇地域に根差した研究・教育とグローバルな視点は、両立する。福祉分野も例外ではない。

◇日本福祉大学は、ＣＯＥでは、福祉分野で我が国唯一の認定（フィールドはアジア、提携大学は南京大学・延世女子大など）

◇一方では、地域の福祉施設や学校・自治体などの連携も進んできている。産（企業というべきであろう）・官（この言葉も嫌だ。行政）・学・民（企業・行政・大学などを構成している人々も家に帰れば、一人の民である）、これらを歴史的に総括していく必要があるだろう。

◇「教育学術新聞」2014 年 10 月 22 日号見出し（過去 5 年の新規採用の合計）

◇科研費　特徴ある分野で私大健闘

◇分野別ランキング「社会福祉学」日福大 1 位